

就職先の確定要因と受験先決定の時期に関する調査
 ケアワーカーを目指す学生の就職動向の傾向
 A Research on the Decision Making Factors and the Time for
 Choosing Workplaces
 Tendencies of Job Hunting of the Students with the Aim of Becoming
 Care Workers

関 好博 小平 達夫

SEKI Yoshihiro, KODAIRA Tatsuo

【要約】

福祉学科 2 年生のうち、ケアワーカーとしての就職を希望する学生に対して、就職先に選んだ事業所の確定要因、そこでの実習経験や見学体験の有無、受験先を決めた時期について調査したところ、まず決定要因では給与や手当、休暇といった処遇面ではなく、通勤の便を最優先に、次いで施設や職員の印象を重視していることが明らかとなった。また、その施設での実習経験の有無よりも、実習での印象のほうこそ就職先確定の決定的要因になりうるということが判明した。同時に、採用試験前の施設見学を重視している傾向がわかった。決定の時期については、12 月末まででは 2 割近くの学生がまだ確定させるに至っていないことから、国家試験を見据えた就職指導の見直しの必要性が明らかになった。

キーワード：施設実習 施設見学 受験先 就職先 介護福祉士養成校

1 はじめに

2016(平成 28)年度に、関・吉牟田によって「福祉学科の 2 年生における進路決定や就職に関する意識調査」というテーマでの研究ノートを発表している。そのときの学生たちが就職先を選ぶ上で重視する条件や大切にしている価値観などを明らかにし、その後の就職指導に反映させる目的で、福祉職場説明会が終わって就職活動が本格化する前の 7 月下旬に行った調査をもとにした研究であった。そこでは、従来は漠然と教員が捉えていた学生の就職先に関する期待や不安、進路決定に影響する要素や特に重視するものなどを、その学年の傾向としてではあるが、明らかにすることができた。

その際の調査項目と今回の調査項目は同じものとはなっていないことと、異なる学生を対象とした 2 年後の調査であるため、対比については参考程度として見ることにはなるが、2 年前の 2 年生が採用試験の受験前に重視した項目と、今の 2 年生が採用試験を実際に受けるに至った要因とを対比させながら、学生の就職先選びにおける傾向を捉えなおすとともに、一般的に意識されがちな施設実習との関連性や、以前より後送りになってきた感のある就職

決定時期についても確認しておくことなどを研究目的とした。また、決定要因の様相から、必要な措置があれば次年度以降の就職指導に反映させることを目的に取組んだものである。

2 アンケートの調査結果

(1) 調査内容及び実施について

設問は次の 4 つである。問 1「最終的に就職先を決めた（あるいは決める上での）主な要因。設定項目から、特に決め手となった順に最大 5 つまで選ぶ」もの。問 2「受験先となった事業所で、正規の施設実習をしたことはあるか」というもの。問 3は「その施設で実習していない場合、採用試験の前に施設見学に行ったか」というもの。問 4は「受験先を決めたのはどの時期か」というものである。

調査対象は、福祉学科 2 年生 35 人のうち、介護職としての採用を目指して就職活動に取り組んでいる 28 人とした（回収率 100%）。実施時期は、ほとんどの学生の進路が確定する 11 月下旬に行った。補足すると、前年度の 2 年生から介護福祉士養成校の学生も国家試験を受験することが可能となり、本学においては 1 月下旬の国家試験を念頭に、11 月末までにほぼ就職活動を終えるよう指導しているものである。男女比は、男性 9 人、女性 19 人である。なお、回答者には委託訓練生 3 人（いずれも 50 代、男性 1 人と女性 2 人）が含まれる。

(2) 調査結果について

①最終的に就職先を決めた（あるいは決める上での）主な要因

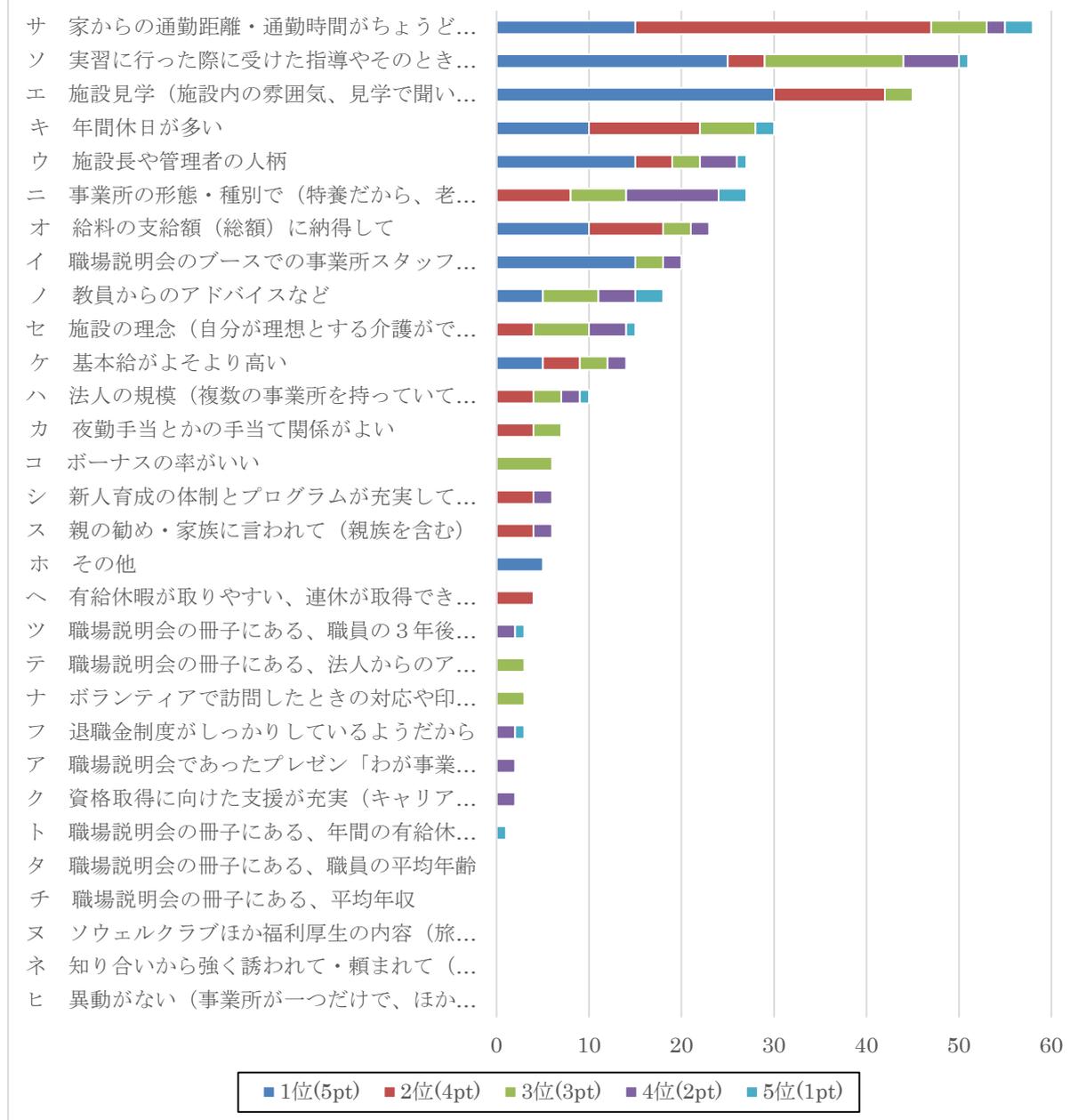
選択肢は全部で 30 項目あり、特に決め手となった順に最大 5 つまで選ぶかたちとした。

第 1 位となったのは、自宅からの通勤の距離や時間がちょうどいいというものであった。前述の 2 年前のアンケート調査において、「進路決定に影響している要素」を尋ねる設問では通勤の便は第 4 位であったことから、予想外の結果となった。なお、このときの第 1 位は福祉職場説明会の 2 週間後であったためか、職場説明会での説明であった。同じく第 2 位は実習で受けた指導や職員への印象、第 3 位は学校の先生からの推薦や紹介である。「ちょうどいい距離や時間」がどの程度かは把握できていないが、毎日のように通う職場であるが故、最終的に通勤の便を最優先させた可能性が考えられる結果となった。

なお、第 2 位は「実習での指導や印象」で、これは 2 年前の調査と同じく上位に選ばれた。その施設での実習の有無は就職先選びであまり大きな要因とはなっていないが、ひとたび実習で訪問すると、その際の体験や印象は受験の決定要因となりうることを示唆している。また、「施設見学での雰囲気や話の内容」が第 3 位となっていることから、実際に施設を見聞きして自分が感じたもので左右される傾向が把握できた。

第 5 位は「施設長や管理者の人柄」であった。第 8 位に「職場説明会での事業所スタッフの印象や説明内容」が上がっており、第 3 位や第 5 位の結果と合わせてみると、学生の職場選択では対応者の人柄・印象も重視する傾向が見て取れる。

図1.最終的に就職先を決めた主な要因（順位による重み付け）



第4位が「年間休日が多い」こと、第7位が「給料の総額に納得して」というものである。求人票を見て、他と比較しやすい項目に重点をおいていることがわかった。ちなみに、「基本給がよそより高い」は11位、「手当て関係がよい」は13位、「ボーナスの率がいい」は14位と、あまり重視されているとは言えない状況である。2年前の調査では、「初任給や夜勤手当が高い」が職場選びで重視する項目の第1位であったわけだが、学生の視線は実際には総支給額に向けられていることが考えられる。ただし、給料総額の高い施設から順に選ばれているわけではないことから、先の「通勤の便」「スタッフの印象」など複合的な要因での選択の可能性がある。

一方、職場説明会で配布される冊子は、職員の3年後定着率をはじめ、年間の有給休暇

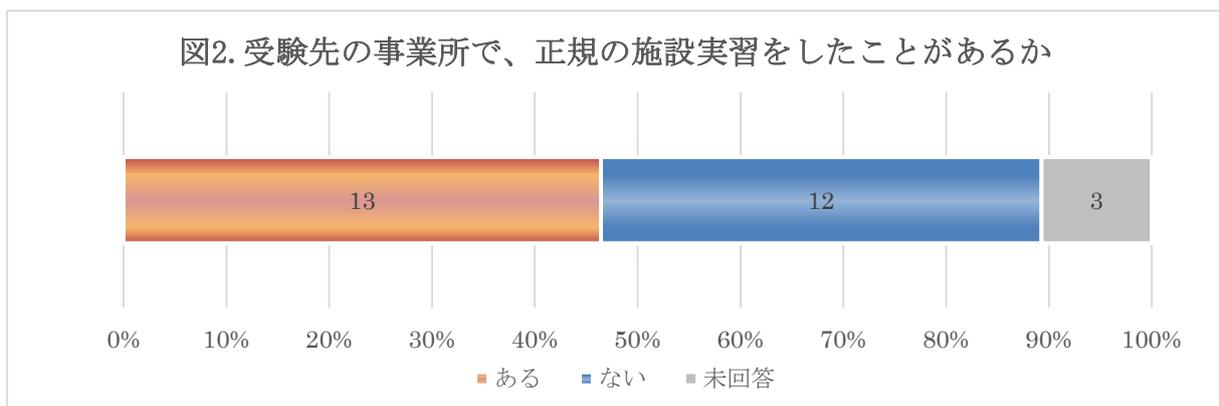
の消化日数のアベレージや職員の平均年齢、平均年収など教員にとって興味深い情報がいくつも掲載されているのだが、ほとんど参考にされていない実態が明らかになった。各事業所のブースでの説明を聴く直前に当日の受付で入手するためか、学生の間で十分に活かされていないのが残念である。説明会後の就職指導での活用が課題となった。

そのほかでは、第 6 位の「事業所の形態・種別（特養、老健など）」が特筆に値する。これは、添付の「選んだ順位による重み付け」グラフではなく、優先順位の 1 位に上げた人数で見れば、「通勤の便」（17 人）「実習での印象」（15 人）に次ぐ第 3 位（12 人）で、選択した人数でも同じ順位である。学生は、はっきりと「特養に行きたい」者や「老健に行きたい」者など、働きたい事業所の種別は明確になっていることがわかる。

なお、選択されなかった項目には「ソウエルクラブなどの福利厚生」「異動がない」「知り合いから誘われて」に加え、先ほどの冊子に掲載の「職員の平均年齢」「平均年収」がある。アルバイト以外に働いた経験のない多くの学生には、自分がこれから就職する職場の福利厚生面や将来の異動と年収までは意識が向かない実態が明らかになった。

②受験先となった事業所で、正規の施設実習をしたことはあるか

「ある」が 13 人、「ない」が 12 人、未回答が 3 人であったことから、ほぼ半々との結果となった。事業所から毎年「学生に就職先の選択肢にしてほしいので、実習施設にしてほしい」、同様に「実習生をぜひ回してほしい」といった申し出をいただくことがあるが、実習で訪問した経験と就職先選びとの間には、今回の調査に限っては、それほど強い因果関係があるとは言えない結果となった。ただし、設問 1 で見たように、「実習での印象」が第 2 位の決定要因であることから、実習での印象で左右されることが伺える。

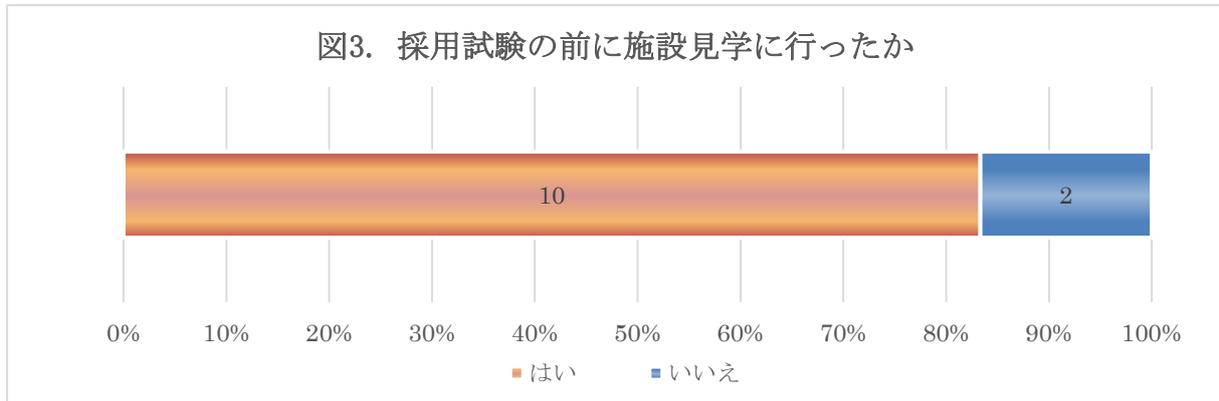


③その施設で実習していない場合、採用試験の前に施設見学に行ったか

回答数が 14 人であったことから、先の設問で実習経験が「ない」と回答した 12 人の学生を対象としていたため、未回答 3 人のうち少なくとも 2 人はその施設での実習経験が「ない」学生だったことが推測される。その前提で見ていくことにする。

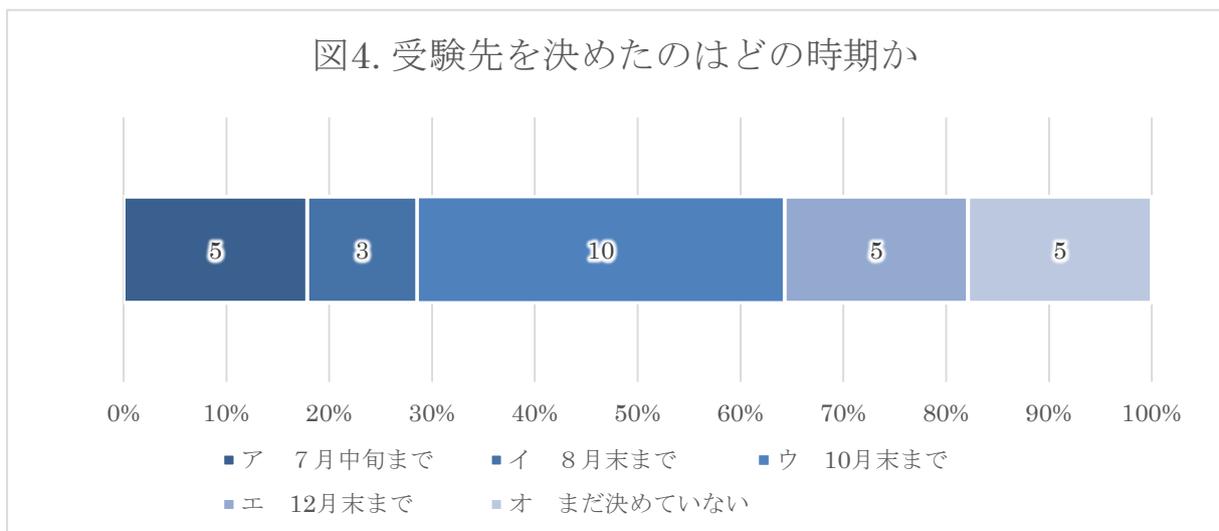
就職指導において、実習やボランティアで訪問したことのない施設への受験を考える学生には、あらかじめ見学してかかることを推奨している。設問 1 の第 3 位「施設見学での

雰囲気や話の内容」と相まって、今の学生が施設見学での印象を重視していることが、ここでも確認できた。



④受験先を決めたのはどの時期か

介護職員の全国的な不足から、養成校の学生にとって「売り手市場」化している感もあるが、そのなかで学生はどんな時期に第一志望の受験先を決めているのかを確認する意味で設けた設問である。



福祉学科の場合、1年生の3月から就職指導が始まっており、2年次前期には「キャリアデザイン演習」という必修科目を設け、履歴書の書き方や面接指導などを通じ、準備と意識啓発に努めてきている。また、途中には施設長や法人本部の管理者など特別講師を招いての講義であったり、「卒業生と語る会」を開いての実際の就職活動についてアドバイスをもらう機会を設けたりしている。さらに、学科長講話として、県内特養の初任給（基本給）のおおよその平均額や求人票にある年間休日の見方と県内最大値も説明している。福利厚生ではソウェルクラブや退職金制度の紹介も行っている。今年度はさらに、自分なりの尺度を持って受験先を選ぶ手助けにと、あなたが考える「いい職場とは」何かを、最大10項目書き出すワークも初めて導入したところである。

それでも、少なくない人数の学生が自分の能力や適性などに迷ってか受験先をなかなか

絞り込めない者や、10 月下旬からの最後の 2 週間実習を終えたのちに見学に行った上で考えたいといった慎重派もいるなど、そのときの学生の特性にも影響されながら、昨年度よりも幾分遅めの受験先決定となっている。

最後の実習が終わった 11 月後半からは、介護福祉士の国家試験対策に専念させたい事情もあり、もう少し早めの行動を促す指導が求められる結果となった。

3 考察

2 年前の調査での「就職先への期待」の第 1 位は、8 割を超える高率で「職場の人間関係がとても和やか」であった。同じく「就職に関する不安」の第 1 位は、「休みはちゃんともらえるか」と同率で「職場の人間関係になじめるか」が約 7 割という結果であった。また、「職場選びで特に重視するもの」の第 1 位が「初任給や夜勤手当が高い」であったことなどから、今回の調査でも処遇条件と職場の雰囲気(人間関係)が上位に選ばれると見ていたが、まずは通勤距離や通勤時間を最優先にして選択肢(就職先)を絞る可能性が示唆された。

その上で、実習に行った際の指導であったり、見学で感じた雰囲気であったりという関わった人や施設の印象といった要素で絞り込むとともに、自分が働きたい事業所種別を大切に選んでいる実態がわかった。処遇に関しては、年間休日数と総支給額は影響しているが、ボーナスの率や福利厚生は学生に意識されにくいことが明らかになった。

また、自分の印象は重視するが、職場説明会の冊子の客観的情報は参考にされていないことや、就職先決定の時期が後ろ送りになっていることが課題として浮かび上がった。

4 まとめ

- (1) 現 2 年生の就職先選びでの傾向は、実習での印象をはじめ、職場説明会でのスタッフの対応や施設見学など、感覚的な印象重視であることが判明した。
- (2) 施設実習の有無との関連性は必ずしもあるとは言えないが、ひとたび実習で訪問すれば、そのときの指導や印象が決定的な要因になりうることが示唆された。
- (3) 就職先の決定時期は、8 割を越えるまでに年内いっぱいかかっていることから、国家試験対策の時間確保を見据えて、学生が納得いくかたちで少しでも早く確定に至るような指導の検討が求められる。
- (4) 就職指導における課題としては、有意義な情報が掲載されている福祉職場説明会での配付冊子の活用と求人票の各処遇項目の捉え方の指導が不十分な懸念がある。

○参考文献

関 好博、吉牟田裕著「福祉学科の 2 年生における進路決定や就職に関する意識調査」
富山短期大学 紀要第 52 巻 142-147 2017-03-10